岡山県立博物館だより
17号
1月31日
1982

海のみち・空のみち
― 昭和56年度特別展について ―

館長　富　岡　敬　之

昭和56年10月10日から11月8日にいたる本年度の特別展は「海のみち」と題して，瀬戸内の海上交通を追究した。古代吉備の繁栄を考えるにしても，大陸先進文化の渡来路としての瀬戸内海が重視されなければならないし，源平合戦の終末も瀬戸内海であったことを忘れ去るわけにはいかない。あるいは近世における江戸・大坂を中心とした全国市場の形成にも，瀬戸内海は重要な役割をになっていた。

展示は原始・古代，中世，近世の瀬戸内海の歴史と，その各時代に使用された船そのものの推移を，出土品，遺物，文献，絵巻物等の絵画，舶載品，絵馬・絵図，模型，その他参考資料など，可能なかぎりの資料を収集して"海の岡山県史"の再現につとめた。もとより，予算と時間の範囲内といういつもながらの制約は今回も避けられぬところであったが，全国の資料所蔵者をはじめ関係各位の御好意と御協力により，一応の体系をもったこの地方の海の歴史を県民の皆様がたに見ていただくことができたことを，館員一同，感謝とともにいくらかの自負をこめて，いま回想している。（図録の写真の一部に鮮明さを欠き，資料としての使用にさしつかえるものがあったことは遺憾であったが。）

それはさておき，特別展終了後間もない11月26日，私は日本博物館協会の欧州博物館事情視察団の一員として，地中海上空を飛んでいた。マドリッド・ローマ間のイベリア航空は快適そのもので，それは，厚い雲の切れ間から時にスペイン本土やサルジニア島などが見えかくれする空のみちであった。

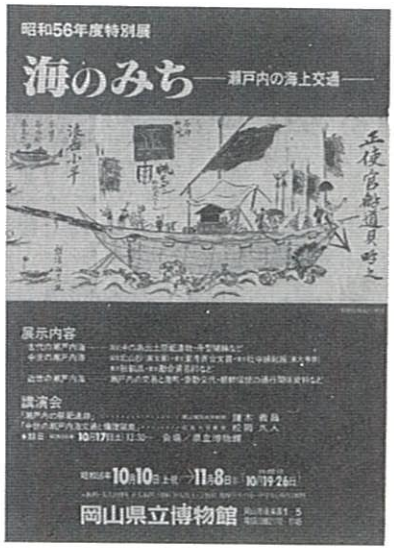
地中海は文字どおり陸地のなかの内海であるが，地中海の一部を斜めに横切る空の旅はジェット機で2時間余り。それは，日本人の私にとってはとてつもなく大きな内海であった。ローマの世界制覇，地中海帝国の形成が，いかに壮大な歴史であったかを，私は機上であらためて実感したのだった。「パックス・ロマーナ」は，私の言語的理解をこえて，英雄的ローマ人たちのたゆまぬ営為だったことを思い知らされたのである。

小さな地中海である私たちの瀬戸内海を，古代吉備は正確にどの範囲で，ここを確保していたのであろうか。瀬戸内海をおさえていたといわれる平氏政権は，はたして瀬戸内帝国の覇者だったのであろうか。あるいは逆に藤原純友の乱は，瀬戸内帝国の形成者として，彼がかつてここを支配した天皇政権に対抗したということになるのであろうか。

少なくとも記紀中心の歴史叙述からは，瀬戸内帝国の中心は畿内王朝という理解しか出てこないように思われる。吉備氏はあくまで反乱軍であって，瀬戸内帝国の王者としてはイメージされない。

地理的にいって，瀬戸内海でローマの位置を占めるものは岡山であろう。にもかかわらず瀬戸内世界において「パックス・オカヤマーナ」は，文献的には考えられないといってよいのではないか。としたら，オカヤマ＝キビ人は，古代ローマ人ほどには英雄的でなかったということになるのであろうか。いまや地方の時代にあたり，一方では考古学者，古代史家たちの実証的研究の一層の深まりを期待しつつ，いつか私もまた瀬戸内海上空を飛びながら，このことについて想いをいたしてみたいと思うのである。

特別展を終えて



昭和56年度特別展は，「海のみち —瀬戸内の海上交通—」と題して開催した。

瀬戸大橋の着工を機に，瀬戸内海は大きく変貌しようとしている。古来，瀬戸内海は海上交通の要路として，わが国の歴史に深く関わってきた。瀬戸内に位置する岡山県の歴史・文化は，この瀬戸内海のもつ，歴史的・地理的環境を考えずしては，語り得ないであろう。

本年度の特別展は，瀬戸内海の変容が予測される，この時点で，瀬戸内海の歴史をふりかえり，それとの関係の中で，わが郷土岡山県の歴史と文化を考えなおしてみようというものであった。たゞテーマが大きく，展示を構成するための資料の多くが，県外にあって予算の制約から断念せざるを得なかった例も多いが，資料の借用は，福岡，山口，広島，香川，愛媛，大阪，京都，奈良などの府県に及んだ。展示点数は約350点，そのうち国宝3点，重要文化財43点を含む。この中には瀬戸内海の入口にあたる福岡県宗像大社の沖の島から出土した遺物，防府天満宮の「松崎天神縁起」，「東寺百合文書」の新見庄関係史料など，県内では初公開の資料が多かったが，特に，中世瀬戸内の海上交通の具体的様子を物語る，燈心文庫蔵「兵庫北関入舩納帳」の初公開は，本年度特別展の意義を深めるものとして喜ばれた。

展示は，「古代の瀬戸内海」「中世の瀬戸内海」「近世の瀬戸内海」の3部で構成した。具体的には「古代の瀬戸内海」は，<古代の舟(船)>・<祭祀遺跡と海上交通>・<社寺縁起絵にみる瀬戸内海>，「中世の瀬戸内海」は，<武士の台頭と瀬戸内海><瀬戸内の海運>，「近世の瀬戸内海」は<瀬戸内の航路>・<参勤交代>・<朝鮮通信使>・<商品流通と港町の繁栄><海上交通と信仰><紀行にみる瀬戸内の景観>などのテーマによった。

なお，会期中の10月17日(土)には，岡山理科大学教授鎌木義昌氏の「瀬戸内の祭祀遺跡」，広島大学教授松岡久人氏の「中世の瀬戸内海交通と備讃諸島」と題する記念講演会を開催，盛況であった。　　(竹林栄一)

古代の舟と祭祀遺跡

海に浮かぶ我が国の文化史を考える時，内外文化の伝播や交通，漁業も含めた経済活動の有力な促進手段として，原始古代から舟が果した役割は極めて大きい。

その舟が歴史的，あるいは地域的にどのような形で日本人とかかわり合いながら変遷してきたかを理解するために，実物や銅鐸・土器・古墳壁画の絵画，祭祀とかかわるミニチュア舟形(代)や舟形埴輪など展観した。

弥生時代から大陸との交通がしばしばあったことは「後漢書」「魏志」の東夷伝などで知られている。その時代から登場する日本の耐波構造のゴンドラ形舟のルーツを考える上で忌宮神社の台湾紅頭嶼の舟は大きな示唆を含んでいたように思う。

一方人間の未知なるものへのあこがれ，そこからの獲得と失敗。当然そこに航海の安全を祈り，また無事を感謝する先人達の海の祭祀が生れたものと思われる。この祭祀も，どこで，誰が行なうかによって規模や性格が変ってくる。玄界灘の真只中に浮ぶ沖の島の祭祀遺跡は大陸との海上交通の安全のために，国家的規模でとり行なわれたものである。ここの遺物の多くは朝廷から奉献されたものと考えられており，その数量のおびただしさと優品であること，今日に至るまでほとんど手つかずのまま存続したことなどから，沖の島は「海の正倉院」と呼ばれている。

国宝 沖の島出土 内行花文鏡

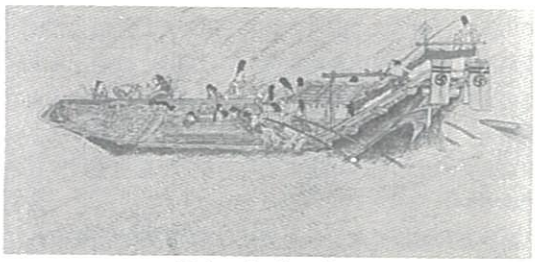
次に表玄関である北九州と畿内を結ぶ国内主要幹線としての瀬戸内海の中央に位置する大飛島・櫃石島の祭祀遺跡があり，大動脈の拠点であると考えるにふさわしい量と質の遺物を擁している。それからすれば，地方国家への玄関とも言える性質のものがある。高島遺跡などである。そしてさらに集落内でとりおこなわれるもので，いわばほとんどすべての集落内での農業や漁業，あるいは製塩といった生産活動に密着した「まつり」だったのではないだろうか。このように大まかに4つに分類される海から見た祭祀遺跡があると考えてよいのではなかろうか。それらにとってピックアップした訳である。それ

ぞれの拠点から出土する遺物の違いが，そうした4分類上の性格や，また時代や種々の意味の違いをもっている訳である。かつてある時代に，それぞれの拠点をふんだ一つのルート上の流れがなかっただろうかと，今一歩踏み込んで見たかった。

また中世において，防府天満宮や大三島など，源平の争乱・水軍の活躍を物語る瀬戸内の甲冑を展示したのは律令体制の崩壊過程の中で武士が登場し，彼らが歴史を動かすようになってくると，従前からの文化的・経済的な海の役割に加えて，軍事的に，また特別な信仰を集めて瀬戸内の島々が機能するようになったことを知ってもらうためである。

また草戸千軒の大陸との交易を物語る遺物は瀬戸内の本格的な対外商品流通の動脈を物語っているし，備前焼の流通は国内の商品流通のルートやその確立期解明に一役買うものである。但し，前々回の特別展「備前焼」との関連から出品点数は最少限にとどめた。　（臼井洋輔）

瀬戸内の船載品



重文　松崎天神縁起

— 社寺縁起絵にみる瀬戸内海 —

社寺縁起絵とは，社寺の創建の由来に，寺院の本尊および神社の祭神の霊験などを加えた説話を描いたものだが，瀬戸内海を舞台に展開する逸話に取材した作例もいくつか伝存している。

神功皇后の牛窓伝説を描く神功皇后縁起（重文・誉田八幡宮）や八幡縁起（東大寺），謡曲「海士」の龍宮珠取り伝説で知られる志度寺縁起（重文・志度寺），海路大宰府へと流される菅原道真を描写する松崎天神縁起（重文・防府天満宮），藤原純友の乱の追討劇を記した楽音寺縁起（楽音寺），東大寺再建に取り組む重源上人の料材輸送を描く大仏縁起（重文・東大寺）など多種多彩である。いずれも史実・虚構を超越し，宗教的な説話や教義を伝達する手段として後世，制作されたものではあるが，その画面から瀬戸内の海上交通の一端をうかがい知ることができよう。

— 仏教美術の遺品 —

古来，瀬戸内海は対外交通の要路であったために，幾多の舶載品が沿岸の港や市から陸揚げされている。また他に，留学僧の請来品，倭寇や文禄・慶長の役（壬辰倭乱）の際の掠奪品等も伝わった結果，ここ瀬戸内の地には中国大陸や朝鮮半島からもたらされた仏教美術の遺品があちこちに散在している。

それらのうち，渡来仏画には流入経路はもちろんのこと，国籍や名称すら決め難い資料を見受けることがある。その要因として，転写が次々と行なわれていること，作画の背景に仏教以外の複雑な信仰が混在していること等を挙げることができよう。新資料の発掘とともに今後の研究の発展が望まれる。

＜主な出品資料＞

大陸…◎五鈷鈴（弥谷寺）　◎錫杖（西国寺）
　　◎十王像（日光寺）　◎孔雀餓金経箱（浄土寺）など

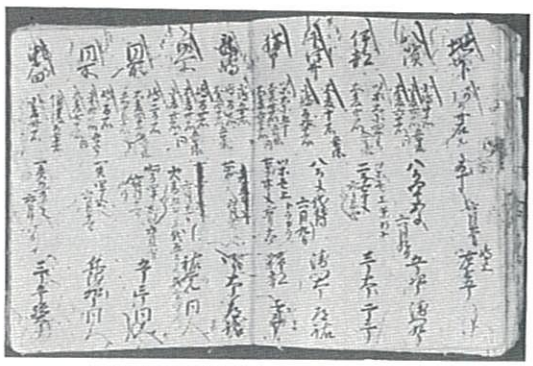
半島…◎地蔵十王像（日光寺）　○高麗版一切経（吉備津神社）　三尊曼荼羅図（宝島寺）　など

（守安　収）

中世瀬戸内の海運

中世には，岡山県内にも，中央の貴族や寺社を，本所・領家とする庄園が存在した。その年貢米が中央へ送られる際には，河川や瀬戸内海の水運が利用された。東寺百合文書の『新見庄東方地頭方山里畠実検取帳』（正中2年）には，高瀬舟を持って年貢輸送にあたった船人への給田，「船給」の記載があり，『新見国経書状』の「船便宜候ハて，つらしま辺に逼留仕候つる」という文言などを合せて考えると，新見庄の年貢米は，高梁川を高瀬舟で下し，連島で海船に積みかえて運ばれたことが推測できる。

また，この時代には，庄園の年貢のほか，商品としての物資が瀬戸内海を運ばれた。その様子は，兵庫港に設



兵庫北関入船納帳　6月6日入船部分

けられた兵庫北関の関銭徴収簿である『兵庫北関入舩納帳』が語ってくれる。文安2年(1445)正月から文安3年正月10日にわたる期間の，兵庫北関の通関船は延1960艘にのぼる。このうち，備前国に船籍地を有するものは315艘，備中船籍のもの17艘で，国別にみると，備前船籍の通関船数は，摂津，播磨についで多く，中でも，牛窓船籍の船の活躍が注目される。積荷の中では，断然塩が多く，次いで米・雑穀・海産物が目につくが，その他，備前焼と思われる「ツホ」，山城国大山崎の離宮八幡宮の油座へ送られた原料の荏胡麻と思われる「山崎胡麻」の記載は興味深い。

このような商品流通の拡大は，各地に港町の発達を促した。展覧会では，牛窓を例として紹介した。牛窓は『風土記』にその地名伝承が載せられる古い港で，中世には，播磨の室，備後の鞆・尾道などと並ぶ，内海航路の要港の一つであった。また『戊子入明記』には，室町幕府が派遣した遣明船の中に，「田原丸」という千石船が含まれていたことがみえ，当時，牛窓の船が対外貿易にも関わっていたことがわかる。本蓮寺は海運業者であったとみられる石原氏の建立と伝えるが，その前身「関浦法花堂」が，京都本能寺の開山日隆から本蓮寺の寺号を与えられ，成長していく姿は，日蓮宗が瀬戸内へ教線を伸ばしていく典型と考えられよう。　　（竹林栄一）

近世の瀬戸内海

近世期において，陸路山陽道とともに瀬戸内海は「海のみち」の大動脈として機能した。参勤交代の大名船団や将軍襲職の恭賀を使命とする朝鮮通信使が往来し，商品流通の発展にともなって諸物資を輸送，販売する船が頻繁に航行した。そこで，近世では上記の諸航行の様相と江戸時代後期に活況を呈する金毘羅・瑜伽参詣などの海上信仰や，当時の紀行にみられる瀬戸内の景観に焦点をあてて構成した。

北前型弁財船

岡山藩の参勤交代は，宝永期頃まで他の西国大名と同様，岡山～大坂間は海路を多く利用した。『池田家文庫』(岡山大学附属図書館蔵)の中から参勤交代の船方記録，旭川右岸に設けられた藩船の船溜(ふなだまり)である「舟入(ふないり)」や藩主が乗船した「御座船(ござぶね)」の絵図等を展示し，「海の大名行列」の様子を紹介した。なかでも，5代藩主継政自身が御座船を描いた奉納絵馬(住吉神社蔵)や，8代藩主斉政が寄進した御座船白鶴丸(はくおうまる)10分の1模型(祇園神社蔵)は，工芸品としても優れたもので観覧者の注目を集めた。

将軍襲職を祝う朝鮮通信使も瀬戸内海を航行した。一行の海上案内と接待は，通行区域を領する諸藩にその責務が課せられ，また「朝鮮通信使来朝備前御馳走舟行列」(延享5年，四宮冨子氏蔵)の絵巻が示すように使節の船を，藩・民船で曳航するという特異な通行事例であった。岡山藩の牛窓での接待記録によると，そのために徴用された船数は総数1,156艘にも及び，特権的通行の実態とそれにともなう通行領域の経済的負担を推察させるものであった。また，牛窓本蓮寺や連島宝島寺に残る通信使の遺墨は，鎖国体制下の国際文化交流を物語る貴重な資料である。

河村瑞賢による西廻り航路の開発を契機とする北前船の寄港は，瀬戸内の港町の繁栄を導いた。特に，下津井・玉島港での活発な商業活動を示す資料は，備前・備中南部の干拓による新田開発にともなう綿などの商品作物の栽培と，北前船がもたらす魚肥(干鰯(ほしか))との結びつきを明確にし，郷土の産業発達史を考える上で重視すべきものである。

波静かな瀬戸内海といえども随所に複雑な潮流があり，ひとたび荒天になると海難の危険性があった。県内各地の奉納船絵馬や金刀比羅宮に奉納された岡山に関係ある海難を描いた絵馬などにより，当時の海上信仰を考えてみた。

最後に，「対参(ついまい)り」として賑わった金毘羅・瑜伽大権現への参詣の様子は，『中国名所図会』『金毘羅参詣名所図会』や文人墨客達が記した紀行に詳しいが，その中に描写された瀬戸内各地の景観は興味深いものがあった。

（田村啓介）

岡山県立博物館だより　No. 17

発行日　昭和57年1月31日
発行者　**岡山県立博物館**
館長　富岡敬之
岡山市後楽園1-5
☎(岡山) 72-1149